

民難のボソ

「長期化すれば 重症患者増える」

岡山 AMDAが帰国報告

北大西洋条約機構（NATO）軍の対ユーゴスラビア空爆で、アルバニアに流入したボソボ難民の緊急救援活動にあたったAMDA（アジア医師連絡協議会）の第一次チーム調整員の関谷武司さん（37）が十五日帰

国し、岡山市の本部で「テント暮らしの難民は、衛生状態、栄養状態ともに悪いので長期化すれば、心身ともに重症患者が増えるだろう」と厳しい現地の状況などを報告した。

関谷さんは今月六日、三

宅和久医師（37）ら二人と、ギリシャからの陸路でアルバニア入り。首都ティラナや北部の国境の町クケスなどで、政府との交渉や医療ニーズの把握などの活動をしてきた。

関谷さんによると、難民の多くは、国境の町に長くとどまっておらず、少人数で機動力のある民間医療ボランティアの活動は非常に

効果的だったという。

約四日間滞在したクケスでは、三宅医師が約百十人を診察したが、寒さなどによる風邪のほか、高齢者の筋肉や関節の疾患、神経症などが目立ったという。

関谷さんに代わる調整員はすでに現地に入っており、二十日ごろに出発し、本格的な医療活動にあたる医師一人、看護婦一人を含む第二陣の受け入れ準備を進めている。